



2021.4.1 No.111 (季刊)

編集 国立ハンセン病資料館
発行 公益財団法人笹川保健財団

目次

- P1 2021年4月 『青い芽』の版画展 開催中
～全生分教室で学んだ中学生の版画を一堂に展示～
P2 多磨全生園ガイドブックを刊行
P2 2020年度「ハンセン病と人権」セミナー（オンライン）開催

- P3 資料紹介 その⑧『スター』
P3 『研究紀要』第8号発行
P4 資料館の現場から その⑩ 清掃チームの仕事
P4 お知らせ／利用案内

2021年4月

『青い芽』の版画展 開催中～全生分教室で学んだ中学生の版画を一堂に展示～

当館では3月2日（火）より、多磨全生園にかつてあった中学校の子どもたちが制作した木版画107点を展示しています。タイトルにある『青い芽』は、中学生と教師の手になるガリ版刷り・手製の卒業文集で、版画はそのなかに綴じこんであったものです。昨年度デジタル化と保存処理を行い、版画の原本を一堂に集めてご覧いただけるようになりました。

園内の中学校は、1953年10月に東村山町立東村山中学校の分教室として認可され、1979年に休校となるまで、全生園で療養していた中学生が通いました。1960年に本校から美術科の教諭が派遣教師として着任しており、その年度末に発行された第4号（1961年）から版画の掲載が始まっています。

これらの版画の特徴は、美しい色彩とすぐれた構図です。ほとんど光を受けずに保存されてきたためか、色彩の鮮やかさは驚くほどです。また版の陰と陽を巧みに使い分けた作品もあって、構図の力強さを際立たせています。

1960年代前半の作品は、分教室の様子や、患者作業とその作業場などがモチーフとなっています。これらは中学生たちがとらえた隔離の場の「日常」の姿です。一方1960年代後半から1970年代にかけては、社会見学や修学旅行で訪ねた名所なども刻まれるようになります。題材の変化から、子どもたちの景色も広がっていったことがわかります。そしていくつかの号で見られる自画像は、子どもたちが制

作の過程で、病気や不安とたたかう自分自身に向き合う経験をしていたことを物語ります。

これらの作品を通して、中学生たちが療養所の中で放った瑞々しい感性と表現にふれていただけたらと考えています。

本展に合わせ、オンラインイベントを2回行いました。3月14日（日）には文集に収録された作文や詩を読む「朗読会『青い芽』の世界」を開催。俳優の中嶋聡さん、佐藤達さん（劇団桃唄309）、山西真帆さん（劇団桃唄309）による力のこもった朗読をお聴きいただきました。3月20日（土）には担当学芸員による展示解説をウェビナーで開催しました。ほかにも会期中、作品を紹介する短編動画を当館Twitterアカウントに不定期でアップしています。

予約制のなかでの開催になりますが、ひとりでも多くの方にご覧いただけますようお待ちしております。

（西浦直子）



版画展示会場の様子

多磨全生園ガイドブックを 刊行



国立療養所多磨全生園には、ハンセン病の患者さんや回復者の方々の生活などを物語る史跡や建物が数多く残されています。その多くは時とともに失われつつありますが、どれも記憶に刻んでおきたいもののばかりです。

当館では、2013年に秋季企画展「想いでできた土地」を開催し、多磨全生園の史跡や入所者の方々にとって欠かせない医療・生活の場である建物などを写真や歴史とともに紹介しました。また、本企画展の図録としてガイドブック『想いでできた土地』を刊行しました。それから約8年が経ち、園内に残されていた歴史的な建物のなかには、老朽化などによって解体されたものもあります。また、入所者の方々の高齢化や少人数化にともなって建物の更新築も進められ、園内の風景も以前に比べて少しずつ変わってきました。そのような状況を踏まえ、多磨全生園の現在の状況や近年の調査で分かったことなどを盛りこんだガイドブックを新たに作成しました。

新しいガイドブックでは、装丁や園内マップ、本文のレイアウトも一新し、表紙には多磨全生園の入所者であった国吉信さんが描いた園内の桜並木の絵をあしらいました。

現在、多磨全生園ではコロナウイルス感染症対策のため、園内への立ち入り自粛要請が出されており、自由に散策することか難しい状況ですが、園内の現在の様子や歴史を知るツールのひとつとして多くの方にこのガイドブックをご活用いただければ幸いです。

(橋本彩香)

2020年度「ハンセン病と人権」 セミナー(オンライン)開催

2020年12月5日(土)、2020年度「ハンセン病と人権」セミナーを開催しました。本セミナーは、2015年に学校現場の先生方を対象にスタートしました。2回目以降は、一般の皆様にもご参加いただきまして、今年で6年目を迎えることができました。今年は新型コロナウイルスの影響により、オンライン配信にて開催いたしました。

本セミナーは、当館学芸員である大高俊一郎による「日本におけるハンセン病問題の歴史と現在」と題したハンセン病についての解説講演と、多磨全生園入所者の山内きみ江さんによる、自身の経験談を元にした語り部講演の2部制で開催されました。

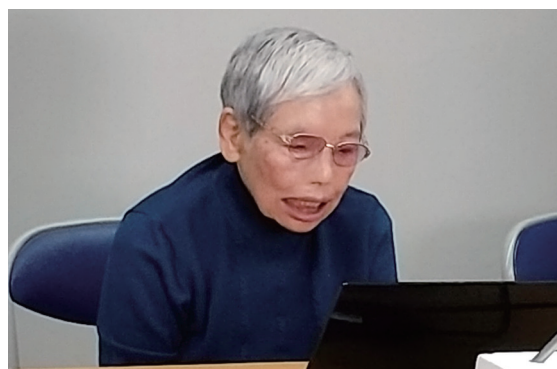
山内さんは、小学生の時にハンセン病を発病し、22歳の時に多磨全生園に入所しました。講演では、入所当時の全生園での生活の様子や園内で結婚した夫との馴れ初め、養子を迎え、養育のため万難を排して社会復帰した事などをお話してくださいました。

「為せば成る、何事も」山内さんは、この言葉をモットーに苦難を乗り越え、現在も様々なことに挑戦されています。最近のコロナウイルスによる自粛生活の中では、体が不自由な中でも、工夫しながら300ピースのパズルを16作品完成させたそうです。

質疑応答の時間では参加者の皆さんからも、多くの質問や感想が寄せられ好評でした。何事にも諦めず挑戦する山内さんの姿に勇気づけられた方もいらっしゃるのではないでしょうか。

本セミナーは、当館YouTubeチャンネルでご覧いただけます。

(牛嶋渉)



オンライン公演中の山内きみ江さん

資料紹介 その⑧

『スター』



『スター』10巻8号と10巻11号

図書室では、国内の資料だけでなく、世界のハンセン病に関する資料も収集しています。今回紹介する資料は、アメリカ合衆国のハンセン病療養所であるカーヴィル療養所の園内情報紙『スター』です。

ハンセン病の治療として「プロミン」の治験を開始し、その有効性が認められ化学療法に道を開いたことでも知られているカーヴィル療養所は、1894年に「ルイジアナ州立レパーホーム」として開所し、のちに「第66海軍病院」となりました。『スター』は、1931年に『シックスティシックス・スター』という名称で発刊されましたが、この海軍病院の番号を由来としています。その命名者で発刊の中心となったのが、ハンセン病患者としてカーヴィル療養所に入所したスタンレー・スタインでした。創刊一周年を迎える前には編集長となり、長く編集に関わりました。

休刊を経て、1941年9月発行の復刊第1号『スター』のなかで、その出版の目的を「ここでの生活において重要な役割を果たし、職業訓練や、スポーツ、娯楽に興味を起こさせること」とし、その表紙には「The STAR」のタイトルとともに、「真実の光でハンセン病を照らす」とモットーが掲げられています。「おぞましい言葉」として差別を助長する「レパー（らい病人）」という言葉を追放し、「レプロシー（らい）」を「ハンセン病」に改めることを提唱するなど、偏見や差別を打破してハンセン病についての正しい理解を広めようとしていました。その足跡は、ハンセン病に「真実の光」を照らし、この病気に対する社会の態度を変えて尊厳の回復へとつなげようとするものでした。

(坂井直枝)

『研究紀要』第8号発行

『研究紀要』第8号が発行されました。当館による研究成果の還元を目的に毎年1回発行されています。

木村哲也の論文「多磨全生園における詩サークルの活動と歴史的意義」は、戦後の多磨全生園で発行されていた詩のサークル誌『猿』『灯泥』『石器』を分析しています。

金貴粉の論文「在日朝鮮人入所者における出入国管理体制と祖国分断」は、戦後の出入国管理体制と朝鮮戦争による祖国分断を在日朝鮮人入所者がどのように受け止めたかを論じています。

西浦直子による実践記録「新型コロナウイルス感染症対策下における新たな博物館活動の事例」は、新型コロナ感染拡大の状況下で資料館にて新たに実施されたオンラインによるミュージアムトークならびに団体向けプログラムについての報告です。

シンポジウム記録「家族が語る もうひとつのハンセン病史」は、2019年12月に開催されたシンポジウムの内容を、大高俊一郎による「解説」を付して全文掲載しています。

シンポジウムの登壇者は、アルトゥーロ・クナナン（フィリピン）、エニー・タン（マレーシア）、ロシータ・ハルン（マレーシア）、ファティマ・アルヴェス（ポルトガル）、エルソン・ディアス・ダ・シウバ（ブラジル）、ジョゼ・アデミルソン・ダ・ロカ・ピカンソ（ブラジル）、黄光男（日本）の7名（敬称略）。家族訴訟の判決を受け、家族の受けた被害実態を海外との比較も含めて知ることのできる貴重な記録です。

『研究紀要』は、来館された希望者に配布するほか、当館HPからPDFファイルでダウンロードできます。ぜひご覧ください。

(木村哲也)



資料館の現場から その⑬

清掃チームの仕事

私たちは、来館者の皆さんに気持ちよく見学していただけるよう、毎日常駐して館内の清掃とゴミ出しの業務をしています。現在は新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、通常の清掃に加え消毒作業も実施しています。

私はこの仕事に就いて9年目になります。かつては1人で仕事をしていましたが、1回目の緊急事態宣言が解除された2020年6月の再開館にあたり、清掃チームが増員され、4人でシフトを組み、2人1組で毎日の業務を交代で行っています。

朝は8時15分に出勤し、消毒の担当者は職員が出勤する前に手が触れるドアノブやスイッチ等をアルコールで消毒します。続いて共用部の手すり、ソファ、それから展示室のケースも消毒しています。来館者が利用するトイレは特に念を入れて、清掃と消毒を含め1日3回は見るようにしています。また、事務室、展示室、図書室等全ての床を材質に合わせた方法で掃除しています。

日々の業務では、来館者の見学等の妨げにならないよう気を配っています。例えば展示室の床を掃除していても来館者がいらしたら、その場所を離れてまた戻って掃除をするようにしています。また最近ではオンライン展示解説やミュージアムトークを行っていますので電気掃除機等の音が邪魔にならないように意識しています。

以前までは団体見学の小学生たちが多く来館し、賑やかな声が聞こえる日もありました。新型コロナウイルスをめぐる状況が落ち着いて、以前のような活気が資料館に戻ることを願っています。(鈴木眞百合)



モップ掛けの様子

お知らせ

■大竹章さんご逝去

2021年1月23日、大竹章さん（国立療養所多磨全生園入所者）が逝去されました。95歳でした。

大竹さんは当館の前身である高松宮記念ハンセン病資料館の設立にあたり、全国の療養所からの資料収集や展示プランの作成などに大きく貢献されました。

謹んで故人のご冥福をお祈りいたします。

■オンラインミュージアムトークのお知らせ

2021年4月24日（土）14：00～

テーマ：歴史の継承～長島愛生園歴史館の取り組み～

講師：田村朋久さん（長島愛生園歴史館）

Zoomウェビナーで開催、事前申込制・定員100名（予約はHPで受付）

参加URLは3月のミュージアムトーク

の終了時にご案内します。

詳しくは当館HPまたは公式Twitter、Facebookをご覧ください。



当館HP

利用案内

新型コロナウイルス感染拡大防止をはかるため、入館制限や予約制の導入などを行っています。詳しくは当館公式ホームページをご覧ください。

■開館時間 10：00～11：30
13：30～15：00

■休館日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入館 無料（要事前予約）

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>